

この号のトップページは『火星通信』がemail-address (cmo@)を持ったとのアナウンスである。CMO-Web-Pageの開設も同時に紹介されている。世界の観測者とコミュニケーションをとって観測情報の交換を行うという『火星通信』の目的がより充実するためにも、時節を得た新しい通信網の利用であった。以来、今日まで続いているわけであるが、十年前のパソコン通信環境と、現在の容量・スピードなどと比べると、信じられないほどの小さな環境で動かしていたのを思い出す。画像一つ送受信するのにもかなり時間がかかっていたのは、もう昔語りとなってしまった。

次いで南政次(Mn)氏による「アラン・W・ヒース先生紹介"Alan W HEATH"」が和文・英文併記で掲載された。ヒース氏はBAAの土星部門のディレクターを長く務められた方で、伊舎堂(Id)氏が独立発見した1990年十月の土星白斑の記事を『火星通信』で見られて興味を示され、お便りをいただいたのが、お付き合いの始まりであったとしている。その後も火星のスケッチや観測レポートを送って下さっているのは御存知の通りである。本文には、ヒース氏の観測歴と人となり詳しく述べられている。また、当時使用中の30cm反射望遠鏡に関して、その由来に続いて、以前、此の望遠鏡で火星の観測をされていた、フィリップス(Theodor E R PHILLIPS)師のことが1910年代の火星スケッチと共に紹介されている。

1994/1995 Mars Note(11)は「S・ホキットビィ氏の北極冠(350°Ls~083°Ls)」と題してS WHITBY (SWb)氏の観測した今期のnpcの縮小状況を、いつもの手法で測定して従来の観測と比較したものである。結果は、ほぼカーブに沿っているが、ばらつきがあり縮小の傾きはなだらかであった。スケッチからの読みとり作業は筆者も手伝って足羽山で行った様に憶えている。

LtEは、Jim BELL氏(USA)からのcmoとの画像送受信テストの成功に関して、またWolfgang MEYER氏からは、五月にViolauで開催されたMEPCO (the Meeting of Planetary and Cometary Observers)成功のことで、1954年から1961年にMfP (Mitteilung für Palnetenbeobachters)に掲載されたドイツでの古い火星観測記事のコピーの同封があった。それに対する南(Mn)氏の謝辞が英文で述べられている。国内からは、森田行雄(Mo)氏、木村精二氏からのものが見られる。

筆者による記事として、七月の天象とTen Years Agoが掲載されている。TYA(6)はCMO #010 (10 June 1986), CMO #011 (25 June 1986)の二号分が紹介されている。いまから二十年前当時の火星は最接近前の逆行に移ったところで、視直径も20秒角を越えていた。六月中旬までの観測報告ではアルシア雲が $\lambda=175^\circ\text{Ls}$ に夕方の白斑として捉えられた観測があったと特記されている。

村上 昌己 (MK)

